

## 明刊『箋註陶淵明集』のことなど

古 屋 昭 弘

數年前「張自烈年譜稿」<sup>(1)</sup>を書いたあと、北京の中國科學院圖書館（正式には文獻情報中心）の善本閱覽室で明末清初の書籍を數冊見る機會があり、張自烈（字は爾公、號は芑山、江西袁州府宜春の人、一五九八—一六七三）に關する新知見を多く得ることができた。年譜の補充を兼ねて以下に記してみたい。

### 一 『箋註陶淵明集』

この本については、井上一之・松浦友久兩氏の教示と好意により他機關のテキスト二種をも加えて考察することができた。すなわち東洋文庫藏本（A）、科學院圖書館藏本二部（B、C）、北京師範大學圖書館藏本の複寫（D）の四種である。まず見返から見ると、Bには「張爾公先生評 東坡和詩附後 陶淵明詩集 敦化堂梓」、Dには「張爾公先生評選 陶淵明集

樂愚堂藏板」とあり（A、Cは見返を缺く、版式の不充分的な對照からも、少なくとも二種の版があることがわかる。序文はAが沈澳、袁繼威、趙維寶、夏允彝、沈壽民の五序を持つのに對し、Bでは沈澳序と趙序（半葉および數行のみ存す）、Cでは袁序と趙序、Dでは沈澳序（末半葉を缺く）のみである。郭紹虞「陶集考辨」（『照隅室古典文學論集』上、上海古籍出版社、一九八三）にも張自烈評本について「卷首有沈澳、夏允彝、沈壽民、趙維寶、袁繼威諸人序。各本亦鮮全載者」と言い、五篇の序を持つのが本來の姿であることがわかる。序文の揃わないテキストの存在は清朝の禁書政策と關連しよう（後述）。

刊行時期については、自烈自身の最新の記に「崇禎六年六月望日」とあることから見て、崇禎六年（一六三三）の秋以降ほどない時期に刊行されたものと思われる。當時、自烈は三

十七歳、江西袁州府宜春縣の縣學の生員から南京國子監の貢監生となり、文名が高まりつつあった頃である。崇禎五年には同郷の友人、南行人司司副の袁繼威の役所や同じく同郷の易嗣重の宿に寄寓、十二月から翌年の春までは同郷の南大理評事、袁一鰲の役所で家庭教師を務めている。南京の書坊の求めに応じて次々と程文集などを出すのもこの頃から數年の間のことである。

後年すなわち康熙十一年（一六七二）、最晩年の自烈は廬山で『重鰲陶淵明集序』（芭山文集卷十二）を書くが、それには、余夙景元亮節義、見晉書齒諸隱逸、乙之、既奮筆刪釐本傳。已又兩鰲其集行世、語具夏彝仲袁臨侯序中。會秦焰版災、旅篋所藏舊帙、蕩悉無復存、惋惜甚。頃陶子出其手評先集徵余序。

とあり、自烈が隱逸というより寧ろ忠義の面で陶淵明を慕っていたこと、その面から昭明太子の陶淵明傳を書き改めたこと、二回に涉り陶淵明集を刊刻したこと、南康の陶氏（陶彥存、事蹟不詳）が自ら評定した陶淵明集の刊行に當たり自烈に序文を求めたこと等がわかる。實際『芭山文集』には「晉陶潛傳」（卷十六）が收録されており、そこにも「淵明不忘晉、宜列忠義、晉書妄附隱逸」云々の附記が見える。また「自撰

明刊『箋註陶淵明集』のことなど（古屋）

墓誌銘」（卷二十二）には國變（一六四四年三月）後のこととして「入信州卜葛川、家焉。與季弟編較成仁錄、梓陶淵明集、余冢宰古方略」とあり、江西廣信府葛源に避難していた自烈が弟の自勲と共に『成仁錄』（明に殉じた人々の記録）や余懋衡の兵書『古方略』の編輯刊行と併行して『陶淵明集』の刊行にも着手していたことがわかる。つまりこの時の刊行が第二回目であり、崇禎六年の刊行が第一回目であることが想定されるわけである。

ここで序文の五人についても紹介しておきたい。まず沈澳は「九十七老人」「清朝遺老」と自署しており、高齡の在野の士であることがわかる。吳山嘉『復社姓氏錄』卷四に南直隸寧國府涇縣の人として沈澳（字は内景）の名が見え、同人物と思われる。序では自烈の容貌について「天骨畸特」と言い、自烈が酔うと「張旭の十四世の孫」と稱したり、「又顧張先生」と大呼したりしたことに言及する。周知の通り唐の張旭（吳の人）は世の人から「張顛」と呼ばれていた。

袁繼威は前述の通り江西袁州府宜春の人、字は季通、號は臨侯、萬曆二十四年（一五九六）の生まれ、天啓五年の進士、國變後の乙酉の年（一六四五）九江總督として清軍に拉致され、翌年北京で刑死。明史に傳あり。陳鼎『東林列傳』にも

收録されているとおり東林派人士の一人である。袁の死後に自烈が編輯した遺文集『六柳堂集』は乾隆年間に禁書となっている。

趙維實は浙江嘉興府平湖の人、文集として『雪廬焚餘稿』『焚餘續草』（共に尊經閣文庫蔵）がある。李天根『燭火錄』卷三に見える蘇州の諸生、顧維實と同一人物だとすれば、國變後に蘇州で殉死。同書に「維實籍學宮時系趙姓、故或稱趙維實」とある。陶集の序では自烈の學問と人柄について「吾友爾公氏、書倉墨塚、破月穿天、不讀非聖之書、不發無源之論、獎薄敦頑、直以千古名教是非爲己任」と言う。なお彼の文集や『讀史快編』は乾隆年間、禁燬處分に遭っている。

夏允彝は南直隸松江府華亭の人、字は彝仲、崇禎十年の進士、長樂縣知縣となり、福王政權崩壊後の乙酉の年九月に入水死。明史に傳あり。松江の文人結社、幾社の中心人物であり、大きく見れば自烈と同じく復社の成員である。彼の著『幸存錄』も乾隆年間の禁書の対象となっている。陶集の序には、南京で袁繼咸の紹介により自烈と知りあったこと、明君の世に生まれながら自烈が出仕しない（薦舉に應じないことを指すのであろう）のを訝る氣持などが記される。『芭山文集』卷八所收「復夏彝仲書」には「拙刻陶集告竣、承諾弁言、幸既見示

云々とあり、夏允彝が正にこの序の執筆を承諾する旨の書簡を自烈に出したことがわかる。

沈壽民は南直隸寧國府宣城の人、字は眉生、號は耕巖、萬曆三十五年（一六〇七）の生まれ、自烈とは南京國子監の同學である。序によれば周鑣の紹介により知りあう。みな復社の成員である。國變後は遺民として宣城で暮らし、自烈の死の二年後（一六七五）に死去。『姑山文集』の著がある。なお彼の娘は自烈の子に嫁いでいる。

以上五人の序に續き、テキストAでは①昭明太子「陶淵明集序」、②同「陶靖節傳」、③自烈「陶集總論」、④本文目錄、⑤「石獻函書目」が置かれている。そして「箋註陶淵明集 明後學張自烈爾公評閱」と題された⑥本文卷一〜六が終ったあと、⑦諸菴居士「律陶」、⑧黃槐開「敦好齋律陶纂」、⑨蘇軾「和陶」が附せられている。いずれも陶詩に唱和した詩を集めたもの。他のテキストの場合も、順序こそ異なるものの、内容的にはほぼ同じである。すなわちBは①③②⑤④⑨⑧⑥（⑦なし）、④⑥⑨に缺葉あり、Cは①②④⑥⑨⑦⑧（③⑤なし）、Dは①②③⑦⑧⑨⑤④⑥の順。

このうち⑦の諸菴居士とは自烈より一世代上の王思任（字は遂東）のこと。浙江會稽の人で戲曲の評などで有名である。⑧

の敦好齋黃槐開（字は子虛）は、自烈の崇禎六年の附記に「仲春予過楊維節先生齋頭、晤閩中黃孺子、劇譚竟日、心識其爲端人也。頃孺子出伯氏子虛律陶纂示予」とあるところから、崇禎六年二月に楊以任（字は維節）の書齋で知りあった福建の黃孺子の伯父に當たる人であることがわかる。この黃孺子については事蹟不明であるが、自烈「與友人論交書」（芭山文集卷七）に列舉された數十人の友人の中にその名が見える。なお楊以任は辛未の年（一六三一）の進士、江西瑞金の人、やはり復社の成員である。

⑤の書目では近刊豫定の自烈編著の書名が次のように多数並べられている。

まずは自烈編定の書から、

五經參同 歷代文汰 明文蒐異 明詩摘 史記侯 諸子推要 老莊滙解 唐宋八大家約 批評陶淵明集 批評白樂天集 批評劉復愚集 批評東臯子集 文山集刪存 批評方青峒集 大學衍義笈行 名臣奏疏定 賢妃要言

次は自著、

經譚 史訊 四傳覈論 杞旰 航侑 兵解 出處譜 孱守銘 楚些 謠述 友古圖 刪補英雄傳 高士傳贊補 燕吳夜錄 琴言 文瓢 倦庵錄 鵲吟 郵牘

明刊『箋註陶淵明集』のことなど（古屋）

果たしてこれらの中の何點が出版されたのか今は不明であるが、前者の中の「批評陶淵明集」が（今回扱っている）本書を指すことは確實であろう。なお橋川時雄「陶集版本源流攷」でも本書を「批評陶淵明集」の名で著録している。

## 二 『眞山人後集』

清初の李昌祚の詩文集である。科學院圖書館藏本は文二卷詩二卷の全四冊、見返に「周彝初先生鑒定 漢陽李過廬先生文集 大業堂藏板」とあり、周有德（字は彝初）の序が康熙七年（一六六八）に書かれていることから、刊行もその頃と思われる。編訂者として周有徳のほか周亮工（字は樸園）の名も見える。李昌祚は湖廣漢陽の人、號は過廬と來園。乾隆刊『漢陽縣志』によれば字は文孫、崇禎十五年（一六四二）の舉人、順治九年（一六五二）の進士、翰林院庶常から檢討となり、康熙年間に河北道、嘉湖道を経て、大理寺少卿となっている。この詩文集の名から眞山人とも名乗ったことがわかる。自烈といつ知りあったのかは不明。『芭山文集』には庚子の年（一六六〇）執筆の「復李來園書」を収めるほか、丁未の年（一六六七）執筆の「復陸懸圃書」「復李乾統書」にも友人として李昌祚の名が見える。後述の清初の詩に「相思二十年」とあると

## 中國文學研究 第二十四期

ころから見て恐らく崇禎年間からの交流と思われる。『眞山人後集』には自烈關係のものとして序一篇と詩一首が収められている。

まず「四書諸家辯序」は自烈が最も心血を注いだ大著『四書大全辯』の姉妹篇ともいふべき書のための序である。執筆時期は不明。尊經閣藏『四書諸家辯』二卷十四冊（未見）は順治刊本と稱されている。なお『四書大全辯』は崇禎十三年（一六四〇）に石嘯居初刻本が出たあと順治八年（一六五二）には南京で増訂版が刊刻されている。さて李昌祚の序では自烈について「如吾友爾公張先生、累辟不就、浮家江上、可謂能退者矣。且持己也甚嚴、而其接人也甚和」と言う。

次に南京で自烈と別れる際に作った五言古詩「白下別張爾公」を見てみたい。

江風寒何早 江風 寒きこと何ぞ早き  
 肅肅向我吹 肅肅として我に向ひて吹く  
 石頭城下來 石頭城下に來たり  
 十日不成寐 十日 寐りを成さず  
 橋邊橫舟艤 橋邊に舟を横たへて艤げば  
 乃見芑山子 乃見 芑山子に見ゆ  
 相思二十年 相ひ思ふこと二十年

相隔數千里 相ひ隔つること數千里  
 相將各有懷 相ひ將りて各の懷ひあるも  
 脈脈不能吟 脈脈として吟ることあたはず  
 天欲成君志 天は君が志を成さんと欲す  
 而我遂如此 而して我は遂にかくの如し  
 斯文應有屬 斯文はまさに屬するあるべし  
 君學誠良史 君が學まことに良史  
 視我直藝署 我を視れば芸署に直し  
 鬱鬱相□毀 鬱鬱として相ひ□毀す  
 有母未遑將 母あるもいまだ將るに遑なく  
 一官眞敝屣 一官眞に敝屣のごとし  
 嗟嗟歷多難 嗟嗟多難を歷たり  
 世情日漣漫 世情日々に漣漫  
 逢場盛顔色 場に逢ふごとに顔色を盛にし  
 深夜浹背汗 深夜に背汗を浹らす  
 誰爲素心人 誰か素心の人たらんや  
 安得不永歎 いづくんぞ永歎せざるを得んや  
 我行悲思殷 我が行 悲しき思ひ殷きも  
 知我莫如君 我を知ること君に如くはなし  
 十月濤聲急 十月 濤聲急なり

岸柳拂暮雲

岸柳 暮雲を拂ふ

腸斷不爲別

腸斷ちて別れを爲さず

徒爾涕紛紛

徒爾に涕紛紛たり

この詩は年月を記さないが、「芸署（書庫）に直す」等の表現から見て李昌祚が清朝の官おそらく翰林院庶常（庶吉士）となつて間もない頃の作と考えられる。

### 三 『陪集』

著者の方中通は南直隸桐城の人、明末四公子の一人方以智の次男である。『陪集』は『陪古』『陪詩』『陪詞』から成る詩文集であり、主に父に従つて過ごした清初の數十年を背景としている。科學院圖書館藏本は全十三卷のうち十一卷を存する康熙刊本である。自然に關する情報をも多く含む『陪詩』卷一「迎親集」は目次によれば「壬辰至戊戌」すなわち一六五二—一六五八年の間の詩を集めたもの。この時期、南明政權との關わりを斷たれ僧となつた方以智は、南京の建初寺の看竹軒に籠りながらも多くの友人との交流を續けていたが、中でも最も親密な舊友の一人が當時（一六五四年）すぐ近くに住んでいた自然である。「迎親集」には自烈の窮乏生活ぶりが描かれている。ある時などは自烈が二日も食物を口にしていな

いことを故吳應箕（字は次尾）の子吳孟堅が看竹軒に報せに來たため、方以智は早速米二十斛を贈つたという。方中通の詩に曰く、

絶糧已二日

糧を絶ちて已に二日

咫尺不相聞

咫尺なるも相ひ聞こえず

乞米未書帖

米を乞ふに未だ帖を書かず

送窮肯賣文

窮を送るに文を賣るを肯ぜんや

何須餅恥罄

何ぞ須ひん 餅罄くるを恥づるを

猶幸鉢堪分

猶ほ幸ひとす 鉢分くるに堪ふるを

有僕同枵腹

僕有り同じく枵腹なるも

追隨問字勤

追隨し字を問ふこと勤なり

この空腹の「僕」すなわち下男は、方中通の注によれば、名を半拙と言ひ、自然に文字の學を習つていたという。この頃、自烈は崇禎末年に一度完成させた字書『字彙辯』の増補作業を續けており、方以智『通雅』の内容を盛り込むべく、しばしば看竹軒を訪れていた。方中通の詩に曰く、

每見先生字

先生の字を見る毎に

從來無艸書

從來 草書無し

五車皆篆籀

五車みな篆籀

七字度居諸

七字もて居諸を度す

## 中國文學研究 第二十四期

筆可存塗乙 筆は塗乙に存すべく

文多辯魯魚 文は魯魚を辯すること多し

叩關鈔五雅 關を叩きて五雅を鈔し

商略到年餘 商略して年餘に到る

ここからは、どんな時にも崩し字を書かない自烈の性格、國變後の動亂期にも自烈が小學の書をなほ多く所有していたこと、『字彙辯』の増補作業が毎日標出字七字ごとに爲されていたこと、などが伺われる。任道斌『方以智年譜』（安徽教育出版社、一九八三年）も引用するとおり、方中通はこの詩に『字彙辯』がのちに『正字通』と改名したとの注を加えている。

このほか『陪詩』には自烈の友人たちの名も散見される。たとえば方以智と同じく明末の四公子の一人冒襄（字は辟疆）。

『迎親集』の「丁酉秋日父執冒樸巢大會世講于白門」の詩からは丁酉の年すなわち順治十四年（二六五七）冒襄が友人の子息たちを南京に集め詩會を催したことがわかる。この時一堂に會したのは方以智の三子、中徳、中通、中履と甥の中發、吳應箕（一六四五年死去）の子吳孟堅、陳貞慧（明末四公子の一人、一六五六年死去）の子陳維崧、戴重（一六四五年死去）の二子戴移孝と本孝、冒襄の子冒丹書、梅朗中（一六四二年死去）の子梅庚、沈壽民の子沈珽、そして方以智の門弟黃虞稷などであ

る。同じく「迎親集」によれば壬辰から戊戌の間（二六五二—一六五八）方中通は南直隸貴池に劉城（一六五〇年死去）の子劉廷鑾を、また湖廣麻城に父の友人梅之煥を訪ねている。更に「省親集」によれば庚子から庚戌の間（一六六〇—一六七〇）方以智と中通は江西南昌に陳弘緒を訪ねている。第二世代も含めた明の遺民たちの往來の様子が伺われ興味深い。

## 四 その他

以上のほかにも張自烈の友人の文集を數冊閲覽することができたが、時間の關係で詳細な調査をするゆとりはなかった。ここでは次の二種の紹介をもって小文の結びとしたい。

戴重『河村集』。これは乙酉の年（二六四五）太湖周邊の抗清活動の中で負傷し死去した友人のために自烈が編集した遺文集である。科學院圖書館藏本は清抄本一冊。序は自烈が書いたもの。なぜか『芭山文集』には收録されていないので貴重である。序によれば、吳應箕、劉城など亡友の文集の刊刻が思いどおりに進まず苦慮していたところ、戴重の二子移孝と本孝が父の文集の編集を懇請したため、篇幅の少ない『河村集』を先に完成させたという。戴重の傳は劉城が生前に書いたもの。戴重の著作として「師陶」一卷と「陶詩考異」五

巻があることを記す。

陳名夏『石雲居文集』。自序は順治三年（一六四六）三月の執筆。自烈に關する記述は少ないが、卷十五の沈壽民への書簡「荅沈眉生」に「昔謂知我者四人、伯宗、爾公、雲子、泊我眉生」云々とあり、陳名夏が爾公すなわち自烈を四人の知己の中に含めていることが注目される（伯宗は劉城、雲子は朱隲）。順治年間、清朝の漢人官僚として吏部尙書の高位にあった陳名夏が、自烈の『四書大全辯』の刊刻を間接的に援助したり、自烈や沈壽民に清朝への出仕を勧めたりしたのも宜なるかなと言えよう。

なお滿洲人の反感を背景に陳名夏が處刑されるのは順治十一年（一六五四）のこと。『陪詩』『南畝集』によれば、甲寅から壬戌の間（一六七四—一六八二）、陳名夏の女婿方中通は南直隸高淳縣強埠村にある岳父の墓に詣でている<sup>8</sup>。

# 注

- (1) 「明代篇」『早稻田大學文學研究科紀要』第39輯文學・藝術編、一九九三年、「遺民篇」（同紀要第41輯第2分冊、一九九六年）。
- (2) 昭明太子の陶靖節傳と自烈の晉陶潛傳との大きな違いは、前者では檀道濟が肉を餽る段が陶淵明が彭澤令になる前に置かれているのに對し、後者ではその段が省かれている點にある。これは

明刊『箋註陶淵明集』のことなど（古屋）

自烈が弟自勳の意見を採用したものである。晉陶潛傳に附された自勳の識語に曰く、「宋書列潛隱逸、爲宋言也。晉書不入忠義、則非知潛者。余初持此議。芑山急難之、因改陶潛傳、刪歸去來辭、而補恥居後代一段、甚合史法。但道濟餽肉在宋元嘉三年、芑山初本據南史置令彭澤前、未免失考。余復馳書正之。芑山爲更定若此」。

(3) 題は「呈父執張芑山先生、原注に「芑山先生自四書大全辯毀板後、窮困特甚。一日吳子班馳報竹關、云：張先生絕糧二日矣。有時貴饋金求文、斥之不受。老父爲餉米二十斛」という。第八行の注：「僕有半拙者習字學、依先生鈔錄不去」。

(4) 題は「芑山先生初輯字彙辯、時過竹關、取老父通雅商確」、注に「後改名正字通」という。第二行の注：「即脫棄亦不作艸書、謂：卽此是敬也」、第三行の注：「所藏六書甚富」、第四行の注：「毎日計編七字」。なお「居諸」は月日のこと、「塗乙」は修正すること、「叩關」は竹關すなわち看竹軒を訪ねること、「五雅」は實際上「通雅」を指す。

(5) これら第二世代の父たちはみな自烈の親友である。なお方以智の看竹軒を訪問した人の中には冒襄のほか錢澄之や吳偉業もいる。

(6) 陳允衡『詩慰』（康熙刊）所收「河邨集」には自烈の序も附されている。

(7) 戊子（一六四八）六月二十四日の劉城の跋に「復社中江南死義者多人、余慨爲之傳。次尾而外、如麻孟璿三衡、沈景山壽堯、夏彝仲允彝、陳臥子子龍、孫克咸臨、江文石天一、徐九一沂、楊

## 中國文學研究 第二十四期

維斗廷樞、黃蘊生淳耀、顧子方杲、吾友也。皆未得其家狀、不能成傳」とあり、吳應箕（字は次尾）と戴重以外にも劉城が多くの友人の傳を書こうとしていたことがわかる。

（8）詩の題は「強埠拜先岳陳芝山先生墓」。陳名夏（字は百史、號は芝山）は高淳縣に近い溧陽の人。